慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会民衆党の創立
Sub Title	Formation of the Social democratic party
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1970
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.43, No.10 (1970. 10) ,p.101- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	潮田江次先生追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19701015-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会民衆党の創立

中村勝範

はじめに

大正十四年（一九二五年）に普通選挙法が成立すると、無産階級の利益を擁護する政党として農民労働党が結成されたが（大正十四年十二月一日）、これは共産主義社会の実現を目ざすものとして即日禁止された。この時以来、わが国の社会主義政党は戦前においても、また戦後においても多数結成され、離合集散の歴史をくり返してきたが、それぞれの社会主義政党は共産主義もしくは日本共産党と、どれだけの距離を置くかということによってその政党の最も本質的な党の性格・姿勢・方向を決定してきている。戦前においては共産党は非合法化されていたから、「共産主義」政党と紙一重まで接近するか（例えば労働農民党）、「共産主義」に知的共感を抱きつつ行動においては共産主義者と一線を画すか（例えば日本労農党）、「共産主義」を排撃して議会主義の上に立つか（例えば社会民衆党）、あるいは「国体」を重んずるナショナリスティックな立場に立つか（例えば日本農民党）等々により、社会主義政党の位置が決まつた。今日わが国には日本共産党が存在しており、マルク

ス・レーニン主義集団が多極化しているが、この時、社会主義集団の位置を決定する原点は日本共産党である。日本社会党はもつとも日本共産党に近く、民社党は日本共産党とマルクス・レーニン主義とに対決する位置にあり、新左翼はマルクス・レーニン主義の立場を執りつつ、日本共産党を左に乗り越えて存在する。わが国においては社会主義者の団体が自らの位置を定める場合にも、また第三者が社会主義者の集団を見定める場合にも、その座標軸の原点とされてきたものは「共産主義」乃至は日本共産党である。

これから述べていく社会民衆党は、座標軸の上でその位置を探ると原点より右に存在する。議会主義を唱えて暴力革命に反対し、全勤労階級の政党であるとして階級政党と対立したという点で共産主義と相対立するものである。大正十四年十二月から大正十五年十二月までの間に、「共産主義」という原点をめぐつて、いくつかの社会主義政党が誕生したが、普通選挙の中で、もつとも国民から信頼を寄せられた社会主義政党は、この社会民衆党であつた。われわれはすでに社会民衆党が結成される準備段階については考察したところであるが、[1] ここではその成立の時点に焦点をおいて論及していこう。

（1）中村勝範「社会民衆党の成立過程――独立労働協会から政党組織準備委員会まで――」（法学研究　第四十二巻第七号）

青天の霹靂――日本労農党結成

大正十五年十一月二十日に新政党促進協議会がおこなわれ、それが政党組織準備委員会に切り換えられて、新党は十二月五日に結党されるということまで決定された。新党結成への気運は盛り上り、新党の樹立があれば直ちに支部が設立される段取りすらできていた地方がこの時点で全国に八つもあつた。[1] 労働農民党から脱党した総同盟を中心とする右派勢力は打つて一丸となつて、新党の結成に一路驀進しているかのごとく思われたが、突如として総同盟の内部から、いま生まれんとする新党とは別に、別個の党を組織するという計画が発表された。さきの政党組織準備委員会がもたれて三日後の十一月二十

三日、総同盟の麻生久は志を同じくする者と芝協調会館に集り、かれらの新政党樹立に関する問題を協議した。その時、ここに集つた人々の中には、労働総同盟からは麻生久、望月源次、石山寅吉、岩内善作、佐藤清三郎、立川嘉三次、山根権三郎、細谷松太、加藤勘十、藤岡文六、安芸盛、日本農民組合からは三宅正一、荒岡荘太郎、須永好、石橋源四郎それに個人として前労働農民党書記長三輪寿壮その他がいた。(2) この時、麻生久が新聞に発表した談話は次の通りであつた。

「過去一年半の間単一無産党に対する労農大衆の熱望は信仰的なものがあつた、然るに左右両翼の病的分子はこの要望を顧みず常に観念的醜き闘争をくり返してついに一年半の労農大衆の血と汗の努力を空に帰せしめたのである、一方地方の実情は総同盟と農民組合の間は沿革的にも、運動の実際も密接な離すことの出来ない関係にあるのである、それを中央少数分子の無用な争いで生木を裂くが如く政治的に別個の運動をしなければならぬとは我々のどうしても堪え得ないことである、故に我々は総同盟中の正義派、農民組合中の健全分子をきう合して真の大衆の声を大地の中から挙げて病的な運動のうちに無産階級の者の歩むべき正道を確立せんとして新党組織を決意したのである『階級的立場を厳守して社会の現実をは握して勇敢に進むこと』これが我々の根本方針である」(3)

この談話にそつて麻生らの目ざしている新党の結成理由を分析してみると、第一に「左右両翼の病的分子」の運動にあきたらないということであり、第二には「総同盟と農民組合」という労農階級の上に立つ政党を組織したいということである。このことは、はつきりいうと、吉野作造、安部磯雄、堀江帰一教授らを産婆役として生まれんとする新党は右翼病的分子の政党であり、それはまた労農階級の立場に厳しく立つものでないという理解の上に立ち、これを批判したものである。たしかに麻生談話にあるように、三教授の世話で生まれんとする政党は労農階級の上にだけ立つものではなく、それは全勤労階級の利益の擁護を立党の精神にしようというものであつた。すでに決定された綱領にも「勤労階級本位」の政党であり「合法的手段」による改革をとなえて「急進主義の政党」を排撃することがうたわれていた。後に、この新党の理論面を指導した赤松克麿は、新党の結成に先立つて、「右翼的立場に立つ大衆政党」をつくらねばならないとし、それは次の点を備

えているものでなくてはならないとしていた。[4]

第一、党の指導精神がロシア直伝の共産主義であらずして、現実主義的社会主義であること

第二、党の機構が組合連合体にあらずして組合に偏しない一般大衆的であることを要する。労農組合を中心とすることはこれを避けなければならぬ。

第三、党は無産大衆の政治的経済的社会的地位の向上をはかりつつ、資本主義の根本改造を志向するものでなくてはならぬが、その手段方法は翻訳的でなく、特殊的国情に立脚したものでなければならぬ。

このように労農組合の上に立つことだけを求めず、共産主義に明確に対立する姿勢に、麻生らは、あきたらなかつたことが、さらに別個の新党をつくろうとした一つの理由であろう。共産主義に反対しても、それとの距離の置き方で麻生らは、他の総同盟幹部と異つていた。後に社会民衆党に結集する人々は、共産主義と反対の極に位置するのに対し、麻生らは社会民衆党と共産主義の中間に位置するものであつた。そして麻生らの反社会民衆党的＝反総同盟幹部派的、すなわち反共産主義にあきたらない空気は、たしかに総同盟の内部にも一部あり、[5]また日本農民組合内の右派にもあつた。総同盟内左派と日本農民組合内右派との結合は偶然でないのだということは麻生と行動を共にした河野密も証言している。[6]総同盟内部に二つの意見があつたことも、たしかであり、そのことは西尾末広が、麻生らの新党結成の発表があつた段階で次のようにいつていることからも証明できる。

「総同盟が単一無産政党を標ぼうして立つた農労党あるいは労農党に対してとつて来た行動、一度脱退して再び加入し二度脱退した事は総同盟に二つの意見のあつたことを現わしているので今日麻生君等のこの事あるは我々の覚悟して居た事でありかつ諒解を持つているのである。[7]」

新聞談話では麻生の行動に対して総同盟政治部長西尾末広は「諒解」を持つていたというが、雑誌に発表した論文になる

と、にわかに語気鋭く麻生批判となる。麻生らが共産党一派と協力して政党を組織できない理由は諒解できるが、西尾らの結成せんとする政党と協力できない理由は理解できない、と西尾はいう。そして西尾は、麻生たちを「只何んとはなく、右翼と言われるのが気持ちが悪いのではないか。或は、労働者階級が未だ観念的な殻を脱し得ずして右翼と言われる事を気にしている状態を観取し、此の一時的傾向を利用せんとしたのではあるまいか。その何れにもせよ、吾が国の労働運動が未だ観念的、非現実的な衣を脱し切れないことの、これも有力なる一証左であろう」[8]と批判する。このように同じ総同盟に属していても西尾末広、松岡駒吉、片山哲、鈴木文治らが右派であるのに対し、麻生は左派という程度の差があつたというところに、麻生らが新政党を結成していく一つの原因があつた。しかしそれは唯一の原因ではない。

第二の理由として、麻生らインテリゲンツィアの、総同盟内部における不平不満の爆発があげられなくてはならない。この間の事情につき、西尾末広は次のように述べている。

「当時総同盟では松岡、西尾の労働者出身が勢力を得て、その指導権がインテリから労働者に移りつつあることに不満があつたようである。また思想的にも麻生君らは社会民主主義にはなりきれないものがあつた。それにまた油を注ぐ結果になつたのは、麻生君の指導していた鉱夫組合は不振続きで会費も殆ど本部に納まらぬ。しかもその運動の現場は何れも遠隔の地にあり、組合運動推進のためには多くの費用が要る。勢い総同盟の会計に依存することになるのだが、その財布を握つているのが主事兼会計の松岡君である。会費は納入せずに支出ばかり要求することに対して、松岡君がこれを渋つたことも当然だ。いよいよ不満はつのつていたようである」[9]

労働者の経済的社会的解放を目ざす労働組合の内部においてインテリゲンツィアと小学校あがりの労働者との間に対立抗争があるとは考えたくない者があろうが、この競合は過去において存在するだけでなく、今日においても陰気な、口に出せない、しかし根強い組合内人事決定のファクターとして存在する。大正十年七月、総同盟の東京連合会大会は棚橋小虎を主事の座から追い、麻生久を全日本鉱夫総連合会に閉じこめたが、これはラジカルな無政府主義者や社会主義者からなる労働者の「知識階級排撃」の結果であつた。この時、排斥された麻生や棚橋が西尾、松岡という現実派から手を切つて別個の政

党を結成しようとしていることが注目されなくてはならない。西尾、松岡はもとより、東京帝国大学出身の鈴木文治も、共に労働者の置かれている境遇を自己のものとして主体的に受けとめ、自己の解放と同じ次元で労働者の解放を考えていた。しかしながら麻生久、棚橋小虎、山名義鶴といつたインテリゲンツィア出身の労働運動家は、自己の境遇から内的に激発されて、自己の解放と同次元で労働者の解放を考えて運動に参加したのではない。かれらはロシア革命の衝撃を受け、米騒動に感動し、これら外的衝撃によつて労働運動に参加した。未来は労働者にとつて開かれた世界であることを予知すればするほど、かれらはその未来社会において自分たちがリーダーでありたいと考えた。レーニンほどになれなくとも、かれらはまぎれもなくレーニンを熱望する政治青年であつた。このようにアンビシャスに満ちた青年たちが、労働者出身の西尾、松岡に押えられていることに不満を抱くのは当然のことである。

麻生は、かれらの新党を結成するにあたつて多くの恩師、先輩、友人にそむかなくてはならなかつた。「君の今後は、政党の幹部としては恩師吉野作造博士と相対峙し、組合幹部としては十年兄事してきた鈴木文治君を向うに廻して立つ事となつた。君としての真骨頂を見せる事はこれからである。安部、吉野、鈴木君等の斯界の先覚に対抗し、新進の君およびその同志は、果してどんな新局面を展開するだろうか」[10]と、ある雑誌は論評する。麻生にしても、はじめからこのようなコースを執る気はなかつたに違いない。安部、堀江、吉野の三教授が産婆役をひき受ける時、麻生は、わざわざ吉野作造をひきだすために自ら吉野のもとまで足を運んでいる。吉野が立場の許しがたきを忍んで産婆役に立つたのは、新党の発企者でもあつた麻生の熱情に動かされたからであつた。[11]このことは麻生が、この段階までは、自らの新党を組織するという決意はまだできていなかつたことを示すと考えていいであろう。三教授の新党結成に関する産婆役としての声明以後、麻生は、新党が組織されても、かれの夢をみたすのがそこから得られないと感じていつたであろう。

麻生が自らの新党を結成しようとする場合、主義の違いは世間向けの「大義名分」となる。そして仲間向けの麻生新党結

成の言訳になる一事件が、この時、洩れてきた。麻生がかつて記者であつた東京日日新聞の政治部長が、新らしく生まれんとする社会民衆党の組織に関係のある事件を麻生に伝えたというのである。それは、労働農民党とは別個の右派社会主義政党を結成する目的を持つて、赤松克麿が発行していた『民衆新聞』は鈴木文治と赤松が貴族院議員有馬頼寧から貰つた拾万円の資金でまかなわれている、というものであつた。これは総同盟が企図している新党は、階級的対決を曖昧にするものであるということを示す理由になる。[12] 今日までのところ『民衆新聞』の資金が有馬から出ていたということを確実に証明できるものはないが、このニュースは麻生をして、新党旗上げを自分に納得させる強力な理由となつた。[13]

総同盟の鈴木文治は赤松、松岡と麻生らの行動を協議した上で声明を発表した。そこには、麻生らの行動は中央委員会の決議にそわざるだけではなく「今回労農党に参加する二三の幹部は過般の中央委員会に列席して安部氏等の提唱する新政党を支持しかつ吾人と共に行動して吉野氏を訪問会見して新政党に関して幸い意見の一致を見た様であつた、故に麻生氏等今回の挙は吾人の甚だ諒解に苦しむところである」[14] とある。昭和二年度総同盟大会報告書には、「麻生君の如きは鈴木会長と同行して吉野博士に新政党創立の産婆役として蹶起せられんことを慫慂した程であつた。すなわち彼等の今回の挙は、自己のなし来つたことに対して自ら非難攻撃をなし、もつて得意になつているという滑稽な現象を呈しているのである」[15] と語気鋭く麻生を非難している。

日本労農党の創立趣意書には、「行き詰れる労働農民党と階級意識さえ朦朧たる日本農民党と極右政党の計画あるのみ」とか、「私党的、私慾的、小児病的運動を排し、真に階級的立場を厳守して、尚日本の社会的現実を把握せる堅実純真なる無産階級運動の正道を確立」するのだといい、自己の正当性を主張すると共に、他の社会主義政党を批判していた。[16] これに対して、総同盟の鈴木、赤松、松岡らが、「麻生氏等今回の挙は吾人の甚だ諒解に苦しむところ」と切り返し、労働農民党も日本労農党の結成や安部・吉野・鈴木・赤松らの新党組織に非難を浴びせるというふうで、社会主義陣営は麻のごとく乱

れた。「新興無産政党」の続出で、世人は「応接にいとまあらざるを思わしめ」るものがあつた。[17] 各無産政党は互いに極右だ極左だ、小児病的右翼だ、小児病的左翼だと罵りあつており、支配階級との闘争の前に、無産政党の陣営で混乱し、エネルギーを浪費しているのである。「無産政党のかくの如き分裂は、ひつきよう第一回の労農党の解散におびえ、共産党征伐に名をかりて新興勢力を抑圧せんとする法律、治安維持法の威力に身をちぢめているに外ならない。抑圧法令の最たるものとして、治安維持法の撤廃を叫ぶ無産政党があまりにこれを恐れて、まんまと普選法と共に治安維持法を制定した旧勢力の手にのつているのを滑稽に思う」[18] このように無産陣営が分裂することは、治安維持法の威力に無産陣営が屈していることであると新聞は警告を発していた。

ともあれ、日本労農党の組織計画は、青天の霹靂のごとくあらわれ、結成される。それは、吉野、安部、堀江教授が産婆役で結成された社会民衆党の結成におくれること四日の、大正十五年十二月九日であつた。

(1) 『東京朝日新聞』大正十五年十一月二十二日号には、新党樹立直後に支部設立の段取り成れる地方として次の八地区があるとされている。
△神奈川県第二区（目下組織準備中の神奈川労働党はそのまま新政党の支部になる）
△千葉県第一区（千葉民政党は直ちに支部となる）
△福岡県第二区
△東京府第五区、第六区、第七区
△大阪第一区
△福島県第一区（郡山）

(2) 『東京朝日新聞』大正十五年十一月二十四日。

(3) 右同

(4) 赤松克麿「労農党の分裂と今後の形勢」改造　大正十五年十二月）

(5) 増島宏、高橋彦博、大野節子著『無産政党の研究』（一九六九年三月）五〇頁。

(6) 河野密「所謂中間派の積極的主張」（解放　昭和二年二月）

(7) 『東京朝日新聞』大正十五年十一月二十四日。

(8) 西尾末広「観念的少数派運動より現実的大衆運動へ」(改造　昭和二年二月号)
(9) 西尾末広『大衆と共に――私の半生の記録――』(世界社　昭和二十六年十月)二五一頁。
(10) 「日本労農党々首麻生久君」(『エコノミスト』大正十五年十二月十五日)
(11) 吉野作造「我が国無産政党の辿るべき道」(『中央公論』昭和二年一月号)
(12) 前掲『無産政党の研究』五〇―五一頁、『河上丈太郎』(日本社会党機関紙局　昭和四十一年十二月)八〇頁、『三輪寿壮の生涯』(三輪寿壮伝記刊行会)三一一頁。
(13) 麻生久伝刊行委員会『麻生久伝』(昭和三十三年八月)二六八頁。
(14) 『東京朝日新聞』大正十五年十一月二十五日
(15) 総同盟五十年史刊行委員会『総同盟五十年史』第二巻　六五頁。
(16) 前掲『麻生久伝』三四七頁。
(17) 『治安維持法の威力』(『東京朝日新聞』大正十五年十一月二十四日)
(18) 右同紙。

国民政党結成の方向

日本労農党は労農組合の上に立つ政党であろうとした。これに対して、三教授と総同盟右派が目ざしていた新党は、散在せる大衆、勤労者にその支持層を拡大しようとしていた。日本労農党創立計画のニュースをきいた時、片山哲は、この党が組合中心の政党であるということで、片山らの目ざすものと異るから脅威とは思わぬといい、さらに次のようにいつた。

「日本で実際に大衆的無産政党を作るには個人が中心になつて組合労働者と共にその二十倍もある未組織労働者のあることを考えねばならない。組合が集つたのではこれ等散在せる大衆を包容することは今の日本では不可能に近い」[1]

片山はそれ故に日本労農党には行き場所に困つている組合を集めることはできようが、それ以上を期待することはできない、というのであつたが、このことはまた、片山らが計画している新党が未組織労働者を吸収するために組合だけにたよらぬということを示してもいた。この片山によつて示されてもいる新党の未組織労働者吸収論に対して、もちろんこれを非

現実的であると批判するものもいた。非現実的であるとする論拠は次の点にあつた。すなわち地方の実情の中には農民組合と総同盟が不可分の状態にあるものも多いという点を挙げ、ここに日本労農党は出現すべくして出現した理由があり、同党は「無産階級の運動の正道」を主張できる要素があるが、社会民衆党は、漫然と未組織労働者や無産大衆によつて結成されると思つているようであるが、これは間違いである。社会民衆党は「知識階級、精神労働者の団結が出来、これによつて支持されるのでなければ、党内の有力なる労働団体から、支持されるかわりに、左右される外はないのである。今のまゝでは社会民衆党は、選ばれる人だけで、選ぶ人のない政党である。永遠に新政党促進団体であり、外にいて助けるという、吉野、堀江両博士の態度と、相去る遠からざる無産政党後援会で、終らなければならない危険がある」[2]というのであつた。

無産政党は組織された労働者や組織された大衆によつて支持されるのでなければ成立することは不可能であるが、今、社会民衆党はそれらの支持なくして漠然たる未組織労働者や未組織大衆に期待して生まれようとしている。このまゝでは下部組織のない、選ばれる人だけの政党で終つてしまうという批判であつた。ここには牢固として抜くべからざる固定観念がある。それは、無産政党は労働者農民の階級的組織の上に建設されるべきであつて、一般大衆とか未組織労働者、勤労階級、自由業をも吸収したいというような階級的に曖昧な無産政党はありうるわけがないという考えである。無産政党をこのように階級政党として把握しようとすると社会民衆党はたしかに漠然としたものになり、日本労農党は右派的な労働組合と農民組合の結合の上に成立されようとしているから、はるかに「無産階級の政治運動の正道」を行くように思われるのも当然である。

所詮、社会民衆党は階級政党でないのだから、せいぜいのところ言論著作印行集会および結社の自由を擁護することを自己の使命として、その陣を進めて適当ではないかという社会民衆党を軽視し切つた新聞社説も出現したが、これも無産政党は階級政党であるべきだという考え方から生まれるものである。この見縊り切つた社説を要約して紹介しよう。

社会民衆党は組合以外に政党の母体を求め、俸給生活者とか勤労階級とかいう観念でとらえているが、それを政治的に組織することは困難以上の不可能である。そうなると社会民衆党は「独立労働協会の産れかわりとなり、独立労働協会は、政治研究会の創立者にして、後に左翼から乗取られて退いた、右翼の人たちの転身として見られたのであるから、もし社会民衆党樹立に際して、完全に旧衣を捨てゝ、新生に解脱しなければ、世間は政治教育と政治運動とのいずれをも得なかつた、旧政治研究会と、独立労働協会の性質と運命とを、思い起さざるを得ないのである」、要するに社会民衆党は政党といえるようなものではないというのである。さらに、政治運動をするには、戦闘力の強い人を必要とするが、この党の幹部に予想されている人々には強烈な人がいない。結局、社会民衆党は、新自由主義的色合が主たる調子をなしているが、これも政治的自由要求の時代を、多くもたなかつた我が国においてふさわしいものかもしれない。「学問も芸術も、文学も美術も、言論も出版も、集会も結社も、すべて警察官憲の権力の下に監視し抑圧されている現時において『日本臣民は法律の範囲内において言論著作印行集会および結社の自由を有す』という憲法第二十九条の擁護の如きは無産政党全部の政策の最先に掲げた『抑圧法令の撤発』の要求ではあるが社会民衆党としては、もつとも穏当なる題目ではないかと思う。」この擁護同盟の傘下には文士、評論家、文筆労働者、裸体製作に干渉される美術家、その観賞家たる大衆、社会科学研究者、労働運動の指導者が集るだろう。その辺に自己の使命を感じてその陣を進めていくことがもつとも適当にして有効だろう。(3)

右に要約した新聞社説は、全体として、社会民衆党の存在を軽視し切つた調子で書かれていることに気づくであろう。もちろん、憲法第二十九条を擁護することは価値あることであるが、現時点においてこの問題こそ無産政党が対決しなくてはならぬ課題であるからこれをやれという期待をこめた社説ではない。社会民衆党がやれそうなものは、この程度であろうという見下した調子を何人もそこから感ずるであろう。社会民衆党をこのように軽視し、見下した筆の運びはどこから来るかといえば、それはこの党が組織された労働者農民に基礎を置く、戦闘的な階級政党ではないというところに原因があつ

た。この社説は、社会民衆党がせいぜいのところ新自由主義の域を出ないといつて、これをさげすんだが、皮肉をこめて、社会民衆党はブルジョアが無産階級の政治勢力を攪乱する役割を持つて登場してきたのだという者もいた。小ブルジョア自由主義の政党は、多かれ少かれ必ず労働者と農民の一部をその指導のもとに収めるから、それだけ無産政党の勢力を弱めるばかりでなく、無産階級の政治勢力との間に、緩衝地帯を設ける利益がある、このような中間政治勢力が有力となることは支配階級にとつても、時としては厄介であるが、この厄介は取引を容易にする利益によつて償われる。このような「現実」に立脚している限りは社会民衆党には慥かに存在理由がある、というのであつた。(4)

戦闘的な階級政党の立場をとらない社会民衆党は以上のようにマスコミの一部において不評であつた。しかし、社会民衆党の構成は、労働農民党と異る所以を次のように説明している。社会民衆党はどこまでも個人を単位としてあらゆる無産階級の要素を包含するにつとめているが、労働農民党は組織労働者に本位を置き、組合即政党の観をあたえている。社会民衆党は広く一般民衆にその門戸を開放し、労働組合、農民組合に属する組織労働者たると、何等組合に属さざる未組織労働者農民たるとを問わず、共に無産者として、これらの人々に門戸を開放している。のみならず筋肉労働に従事しないけれども、共に無産階級に属する俸給生活者、自由職業者、小売人等をも包含せんとするのである。このように未だ組織されておらない一般無産民衆を糾合して、組織労働者と同様、一個人の資格をもつて入党し得るようにしているところが社会民衆党構成上の特質であり、同時に労働農民党との異質となる点である、(5)というのである。社会民衆党が階級的に曖昧である点にこそ同党の特質があるのだと切り返すのであつた。労働農民党は結党直後の中央委員会決議で「本党は勿論大衆の参加を熱望するものなるも、党将来の健実なる発達を図るために、特に此際次期中央委員会開会まで左記団体に属する個人のみを勧誘するものとする。」といい、日本農民組合、日本労働総同盟、官業労働総同盟、東京市電自治会、司厨同盟、日本労働組合総連合、製陶

労働同盟、海軍労働組合連盟、日本海員組合、大阪市電自助会の各組合が列挙されていた。これは共産主義の団体と個人に対する警戒からとられたものであつたが、この決議によつて労働農民党は組合を中心とする政党となつた。労働農民党がこのように組合中心の政党であると、「新に抬頭し来つた一千万人の新有権者、即ち一般無産大衆とも謂うべき階級の政治行動を有利に展開せしむるためには、如何にしても我等は右翼無産政党の結成を急がざるを得なかつた」[6]のである。左翼からは非難されようが、不評を買おうが、社会民衆党の当事者にはかれらの言分があつた。島中雄三は社会民衆党に属する者として左翼の諸君に一言しておきたいと次のように言つた。すなわち「諸君が牙を鳴らして狂犬の如く吠える時に、吠えつかれる当人は平気であつても、路傍の大衆は皆遁げ腰になる。そして味方するつもりのなかつたものまでが、吠えつかれる方に味方する。斯くして我々の社会民衆党は、諸君の予期とは正反対に、大衆へ大衆へ大衆へと発展するであろう。社会民衆党としてはそれでいい。左翼の戦術として果してそれが利巧なのか、馬鹿なのか」[7]というのであつた。

社会民衆党は今日いうところの国民政党をめざしたのであり、労働農民党と日本労農党は階級政党を指向していた。赤松克麿は日本における無産政党が階級政党の立場に立つことの不可能なる理由をつぎのように指摘した。すなわちこの時代の労働者階級および全貧農階級のなかで組織されたものは極めて少数であつて、組織労働者の如きは全労働階級の六乃至七パーセントしかない、その六乃至七パーセントのなかの少数派である左翼または中間分子を吸収することに成功しても、その他のおびただしい労農大衆は置去りにされることは明らかである、いわんや俸給生活者、自作農、その他の中産階級、下層分子の無産勤労大衆は、党に抱容しきれないといつた。[8]国民政党である社会民衆党の特徴について、赤松は労働農民党を引合いに出しつぎのように説明する。「労働農民党では、共産主義を以て唯一の階級的真理と認め、共産主義者を中枢勢力としない政党は真の階級政党にあらずと主張して居る。」[9]これに対して社会民衆党の方は無産大衆の民主主義的なる階級的成長に重要性を認めこれに向つて全幅の努力を注ぐという。つまり社会民衆党においては民主主義の価値を認め議会主義を擁護

し、なるべく大衆と共に歩み、大衆の自主的発展に応じて戦術を定めて行こうとする。他方、労働農民党は、議会は彼等の勢力を宣伝する舞台に利用するだけであり、固定した革命主義者の一群が、巧妙なる宣伝と戦略とによつて、大衆の反抗意識を端的に激発し、以て速かにブルジョア階級の手中にある政権を奪取しようというのである。以上が赤松の階級政党不可論の根拠であり、国民政党の立場に立つ社会民衆党の位置づけである。社会民衆党グループは自分達が脱党してきた労働農民党や自分たちのグループから抜けて行つた日本労農党派と激しく論争しながら、彼等の政党結成へと前進していくのである。

（1）『東京朝日新聞』大正十五年十一月二十四日。
（2）「無産政党の小党分立」（『東京朝日新聞』大正十五年十一月二十六日）
（3）「社会民衆党に望む――憲法第二十九条擁護同盟――」（『東京朝日新聞』大正十五年十二月四日）
（4）山川均「無産階級政治戦線の混乱」（改造　昭和二年一月号）
（5）片山哲「社会民衆党の立場」（解放　昭和二年二月号）
（6）片山哲「社会民衆党の綱領と総選挙」（『経済往来』昭和二年二月号）
（7）解放　昭和二年二月号。
（8）赤松克麿「無産政党の陣列を観る」（『文芸春秋』昭和二年二月号）
（9）右同。

社会民衆党の結成

日本労農党派が分離していつたあと、大正十五年十一月二十九日に社会民衆党組織準備会特別委員会が開催され、結党式における宣言文起草、入党申込者の処置等を決定し、つぎの申合せをして解散した。「新党の構成はあくまで個人を単位とするがこれは組合の延長乃至連合の形式をもつてしては党の大衆的発展を期し難しと信ずるからである（中略）今や他に無産

政党の組織せらるるものありとするも我等の方針は依然として動かず当初の方針に向つてまい進する、但し協力し得る場合においては敢えて他との協力を辞せざるものなることを言しておく。」[1]新党結成の方針は変らなかつたが日本労農党系の分裂は申合せの字句とは裏腹に大きかつたことが伺われる。

社会民衆党の結党式は十二月四日午後二時より東京・芝公園協調会館において行なわれた。結党式に先立つてこの日午前十時より第二回準備委員会を開催し、吉野作造氏を議長として結党に関する準備事項を協議し、綱領政策案の修正を可決した。次いで党則案の審議に入り、党名については社会民衆党ならびに日本労働党の両説がでた。鈴木文治は日本労働党説を強調したが赤松克麿は我が国社会の客観的状勢からして社会民衆党と命名するのが適切であると主張し、これを支持するもの多く採決の結果、大多数を以て社会民衆党と命名することに決定した。次いで宣言起草委員ならびに役員銓衡委員として次の各七名を選出し、結党式の司会者として安部磯雄を推薦しここに結党の準備を完了した。吉野作造は衷心より満足するという趣旨の挨拶をし、前途を祝して正午閉会した。[2]

宣言起草委員　島中雄三、白柳秀湖、中沢弁次郎、西尾末広、渡辺善寿、赤松克麿、小川渙三

役員銓衡委員　馬場恒吾、西尾末広、渡辺善寿、小山寿夫、山崎一雄、片山哲、宮崎竜介

午後二時より結党式は挙行され安部、吉野をはじめ総同盟、工人倶楽部、独立労働協会、東京官業労働組合その他約百二十名が列席し司会者の安部が開会の挨拶を述べ、鈴木文治が推されて議長席につき議事に入つた。[3]劈頭、片山哲より組織準備会の経過報告があり、次いで松永義雄より祝電祝詞の披露があつた。馬場恒吾より綱領、政策案を説明し、二、三の質問があつたが万場一致で可決された。宮崎竜介より党則案説明があり万場異議なく可決した。つづいて島中雄三がたち宣言案を朗読しこれも万場拍手のうちに可決された。つぎに党役員の選挙に移つたとき馬場恒吾が銓衡委員会の報告を行ないこれもまた熱烈なる拍手のうちに万場一致で可決された。その役員は、中央執行委員会議長安部磯雄、中央執行委員には市民代

表として島中雄三、労組代表として鈴木文治の決定をみた。なお中央執行委員は、予想せられる海員組合、官業労働総同盟その他の団体の入党を待つて決定されることになつた。書記長には片山哲が選ばれ、中央委員には次の三十名が選出された。そのうちわけは一般から選出された者十二名、党員分布の状態によつて選出された者九名[4]、欠員は新加入団体を予想して、一般に三名、党員の部に九名を留保した。

選出せられた役員は順次党員名簿に署名し、壇上に整列して拍手のうちに紹介を終つた。安部磯雄は役員を代表して就任の辞を述べると共に、党の指導精神を明らかにした。当時の新聞によれば彼の演説は次のように紹介されている。[5]

「政党が団体である以上は統制という事が必要である我々は党則に現われない信条として

一、我々は金力を重視してはならない。

二、党員は自分の名誉利達のために断じて相争つてはならない

の二つを掲げたいとて既成政党が如何に金力のため相争いこれによつて政党の腐敗を来しているかを説明し殊に党員の融和について諸君は人柄手腕において決して現在の政治家に劣らないと信ずるが互に争うならば如何なる政党も必ず破壊する党員の間がうまくいつていれば千鈞の重さとなり如何なる陰謀妨害といえども恐るゝに足りない、と厳重に党員の個人的野心を戒め更に現に分立せる無産政党も同根に生長するものなるが故にこれに対してはもちろん、既成政党との間にも泥仕合を避けなければならぬことを説き終りにベツレヘムは救世主をだしたが故にユダヤ郡中の小さな町も永く歴史に残る大きな町となつたとバイブルの言葉を引き社会民衆党は一方無産大衆を政治的混迷から救うと共に日本の政治を救うもので今日の結党式は永く日本政治史上に記念せらるべき日である」

この演説は、安部磯雄の生涯における最も格調の高い名演説といわれるものであるが、この時会場に集まつた人びとは崇高荘厳なる安部の演説にうたれ、感激は絶頂に達したと語り伝えられている。なお分立せる無産政党との間にみにくい対立をすべきではないと戒めたとき、安部はつぎのように説いたと別書に記録されている。

「諸君は七歩の吟を思い出してください。いわく『豆を煮るに豆殻をもつてす、豆は釜中にあつて泣く、なんぞそれを責むるの急なるや、もとこれ同根なり』」[6]

左、中間、右と四分五裂の無産政党であつた。安部は自己の信念に忠実であるあまり、他の無産政党を激しく責めるという態度はとらず、また党員にも他党批判を慎しむよう説いたのである。その後の無産政党の対立状態は、安部の説いたような紳士的な関係ではなく豆を煮るに豆殻をもつてするような激烈なものとなつて行つた。

安部の大演説が終ると、中沢弁次郎が緊急動議を提出し社会民衆党成立の産婆役をつとめた安部、吉野、堀江（帰一、但し堀江は当日欠席）に対し会衆一同起立して拍手をもつて感謝の意を表した。ここに、後年、無産政党の統一が行なわれるまで無産陣営にあつて主導的な役割を果し、したがつて国民からも諸無産政党の中にあつて期待されること最も大であつた社会民衆党は結党した。

（1）『東京朝日新聞』大正十五年十一月三十日。
（2）『日本労働総同盟全国大会資料・昭和二年度全国大会報告書』四一頁。
（3）片山哲「現実主義大衆政党の組織」（新潮社『社会問題講座』第十巻〈大正十五年十二月〉所収）
（4）前掲『日本労働総同盟全国大会資料・昭和二年度全国大会報告書』四二頁。
〔一般より選出〕安部磯雄、鈴木文治、島中雄三、片山哲、賀川豊彦、中沢弁次郎、白柳秀湖、為藤五郎、宮崎龍介、赤松克麿、小池四郎、松永義雄
〔地方党員の分布に基く選出〕西尾末広（大阪）、三木治郎（神奈川）、渡辺善寿（東京）、染谷儀右衛門（千葉）、松岡駒吉（東京）、小山寿夫（東京）、田中利勝（福島）、村井小之助（大阪）、小川渙三（岐阜）
（5）『東京朝日新聞』大正十五年十二月六日。
（6）片山哲『回顧と展望』（福村出版一九六七・二）一四〇―一四一頁及び片山哲『安部磯雄伝』（毎日新聞社一四三頁）